がわかる。そして序章はその思想を重要視する面からいつても不可欠のものである。

又説話的側面からみても序章によつて既に説話的な世界の媒介されているという事は前に確認した。そして物語中の一つ一つが充分独立し得るものがあるとしても平家興亡の史実を描くという事が主題であるという点からみると序章の引き出している清盛が必要であつてその構成の巧みさには感嘆せざるを得ない。この様に序章が不可欠のものであるという事からしても序章は「平家物語」に於て重要な位置を占めるものであり、思想的面を重視するに当り意義あるものだといつてよいのではなかろうか。

以上述べてきたように、序章の表現に集約せられる作者主体の広義に於る思想的意義をこれ迄に受けとられてきたよりももつと積極的に捕え直す事が、「平家物語」を理解する為の一つの重要な手がかりとなると思うのである。又その事を「平家物語」という作品自体が逆に我々に要求していると考えざるを得ないのである。

註1、平家物語　古典文学大系32　岩波書店
註2、平家物語の研究　佐々木八郎著　早稲田大学出版部
註3、平家物語　石母田正著　岩波新書　P37
註4、平家物語　石母田正著　岩波新書
註5、〃　〃　〃
註6、無常といふ事〃平家論〃　小林秀雄著　岩波新書
註7、中世文学の達成　谷　宏著　三一書房　P14
註8、平家物語研究(中)佐々木八郎著　早稲田大学出版部　P131～P132
註9、平家物語　石母田正著　岩波新書　P47

八代集における枕詞の研究

――その統計的考察――

杉　焼　シゲミ

枕詞の呼称は古く、発語、次語、異名、諷詞、枕言などが用いられ、その意味にも広狭があつた。平安時代の「古今集仮名序」や源氏物語などに「枕詞」の字が見えているが、現在の枕詞とはその意義を異にしている。

枕詞が今日の修辞用語となつたのは、室町時代の頃で、親房の「古今集記」に

久堅のあめとは惣じて天を久堅といふ。久しき堅き義なり。かやうの詞は、古語の残れるを今の世に枕詞と名付けて、あながちには、天を不付して只空を久堅と心うると見えているが、「今の世に」とある所から枕詞と呼ばれ

た時期は、親房（一二九三～一五五四）の時代からあまりさかのぼつた時期ではなかつた、と考えられる。

次に、枕詞について、矢田部公望は「次の語を引き起す語」とし、仙覚は比擬の義を考え、真淵「次の詞句に冠らしむる詞であつて更に声調を諧ふる為に設くる辞にして、一方にては他の修飾となる」といつている。その他、諧調の意にとるものに、官長、景樹、内遠があり、土子金子郎は「枕詞は滑稽の詞なり」とさえ云つている。又、外国人である チャンパレン は意義なき詞 にして同種語（アッポジイション）と成立を同じうす」とみている。これらは、枕詞を見る角度のちがい、例えば、枕詞をその性質からとくもの、目的の面からとくもの、又効用の面からとくもの等からくる相違だと考えられる。

枕詞は「あしひきの」「ひさかたの」等五音より成るもの、「しなてる」「さねさし」等四音のもの、「うつせ」と三音のもの、「ひたちおびの」「むさしあぶみ」等六音のものなど種々のものがあるが、通常五音節のものの便用度が高い。

山岸徳平氏は、

枕詞は、上下相関的の措辞にしてその上半は通常五音節より成り、下半の為に従属の地位に立ちて、或は、その修辞となり、或は声調を助け、以て読者に明晰深甚の印象を与へ、或は勿劇の変化によつて心意を楽しましむるものなり、

と定義づけられているが、私も「枕詞は、普通五音、またはそれに準ずる形で主文の意味とは関係なしにある詞句を言い出そうとする時に、その上に被らせて用いる一種の修飾語であり、枕詞は、後続の詞句との関係において成立するものであつて、独立しては枕詞と称すべきものではない。」と考える。

一般に枕詞が、真の生命を有し、精彩を放つたのは万葉時代までで、古今集以後は次第に衰えていつた。といわれている。しかしこの時代になると、歌に秀句、縁語が盛んに使用され、枕詞も、万葉時代に行われたものを精選し優雅なものを襲用し、あるいは接続の法をかえ、転義したり技巧的に大きな発達をみたので、ついには秀句とも枕詞とも分ち難いものも数多く生じ、懸詞の方が流行し、枕詞は大いに衰え、後拾遺以降に於ては、只慣用に従い、無意識的に用いたに過ぎない。

枕詞の研究は先にも述べた様に、古い時代から数多くの学者により取り扱われて昭和二年にはその集大成ともいうべき、福井久蔵氏の「枕詞の研究と釈義」が出版されている。

従つて、この「枕詞の研究と釈義」及び、大塚龍夫氏の「枕詞辞典」を参考にして、「国歌大観」をテキストとし八代集に使用されている枕詞をことごとく拾い上げた。

八代集において、如何なる枕詞が多く使用されているか

どんな歌人が多く使用しているか、各々用例数の上から検討し、それらを比較する事によつて八代集に於ける枕詞の特徴が見い出されれば本望である。

一、八代集における枕詞

八代集における総歌数九四九四首中、枕詞の使用されているものは七七二首で全体の八・一％を占めている。これを集別にながめると、後撰集の一七六首が最も多く、詞花集においては、わずか七首に過ぎない。しかし、全歌数に対する割合は、古今集の全歌数一一一一首に対して一七三首の一四・三％が最も多く、次が拾遺集の一二％、後撰集の一一、五％となつている。ところが次の後拾遺集になると、一二二〇首中四二首で全体の三、四％に過ぎず、先の三代集の半分以下の数があらわれている。金葉・千載・詞花もそれぞれ四・三％、二・六％、一・七％と急激な減少を見るが、新古今においては一九七九首中一三九首と数の上からも、七％という割合の上からも増加している事が目立つている。

さて、右の数字上から考えるに、三代集に於ける枕詞が各々一〇％以上の割合を占めていることは、万葉時代に比べて枕詞の精彩が薄くなつたとはいえ、まだまだこの頃までは和歌の修辞上に於いて枕詞の占める割合は大きかつたと考えて差支えなかろう。

ところが、三代集に使われている枕詞二〇七種のうち、一三二種が万葉と同種類のものであり、後の七五種が新しく創造されたもの又は言葉の変化しているものである。

例えば、後撰728

逢ふことをいさほに出なむしのすゝき忍びはつべき物ならなくに

では

忍びはつべきと同音を重ねて調となせり、万葉には、しぬずすきともしぬぶともいひしを、三代集の頃より、ぬをのと改めて呼べり、しのずすきは穂を出さぬ枯薄、この忍ぶは堪へ忍ぶの意、上句にほに出なむといへる縁語を置けり、

とある。こう考えてくると、全体五三七例のうち、万葉時代のものが三三四例で約六五％をしめている。

以上数字からみれば、三代集までは修辞法における枕詞は万葉時代のものが多くの比重をもつている事が判明する。

後拾遺集になつて急激な減少をみていることは、天暦十年から当時に至る凡そ一三一年間の歌で拾遺集に洩れたものを集めようという編集意図と、古今、後撰の作者、梨壺の五人の歌は省くという撰修方針によるものであり、先の「後撰」「拾遺」の作者が二百人内外であるのに対し、本集は三百人を越えていること、作者は、和泉式部の七一

首が最も多く相模四十首、赤染衛門三二首、伊勢大輔二七首、能因三三首が多い所であるが、枕詞使用数では、式部一首、能因二首に過ぎない事も枕詞減少の一因であるかもしれない。

又、新古今集に増加のみられるのは、その序にある如く万葉の歌やその時代の人の作を採つていることがあげられよう。しかし、塩井正男氏が、その著「新古今和歌集詳解」の中で、およそ次のように述べられていることに注目したい。

新古今集時代は、古今集時代の思想題目修辞を祖とした和歌の範囲内では、最早技術的修飾的進歩すべき余地がなく、絶頂に至れり……古来の修辞法にて、此の時代にあまり用ひられずなれるは、枕詞や序歌の法なり、枕詞や序歌は元来一首の意味に多く関係なきものなれば、成るべく深く細かなる思想を尽くさむとしたる当時に衰へたるは当然といふべく、而して、詩想を主とすべき詩の本意、自からかくあるべきものにて、これ等も和歌の技術の進みたるを知る一端といふを得べし。

二　枕詞の発達

福井久蔵氏は、「枕詞の研究と釈義」の集中、「三代集時代の枕詞」を設け「三代集に見ゆる新しき枕詞は作者の知られたるもの凡そ一三〇種、未詳のもの一四〇種に殆かるべし。中に貫之の作最も多く、躬恒、忠岑、友則、能因之に亜げども、貫之、躬恒の外は新鞏のもの一〇種にも満たず（こは撰集のみならず家集をも通じての数なりとす）」と、三代集時代の枕詞とその特徴を分析されている。これを実例に照らし合わせる為、八代集に用いられている枕詞を全部抽出すると二四八種、八〇一例となる。その中でも「あしひきの」七四例、「からころも」二九例、「ちはやふる」二一例、「ひさかたの」二九例、「いそのかみ」一六例、「たかさごの」一五例、「あらたまの」一四例、「あつさゆみ」一四例「くさまくら」一三例、「うはたまの」一二例、「玉くしげ」一〇例、「つのくにの」一〇例、「くれたけの」一〇例等は数の上からみても当時多く使用されていた事が証明される。

次にそれらの枕詞が如何なる語に掛かるかについて、又変遷を知る為にも、万葉集と八代集とを合せ考えてみるにここでは一番数の多かつた「あしひきの」は、万葉に於ても一〇二例が使用されており、その中の九三例が「山又は山に因めるもの」に掛つている。

八代集に於ては七一例、拾遺集七七九には「あしひきの葛城山にゐる雲の立ちてもゐても君をこそ思へ」と山の固有名詞に掛けた例が伺われる。万葉に於ては、他に、岩根一種、やつを一種、嵐一種、尾上一種に掛り、八代集では病一種（後撰633）かなたこなた一種（新古688）大和撫子

（新古101）に掛かつている。

更に福井氏の同書の中で分類された同じ方法で八代集の枕詞について分類すれば、

1、比喩に属するもの　九三種
2、同音反覆のもの　三四種
3、形容的修飾句的なもの　一五種
4、連想により或いは転義したもの　四〇種

古今515からごろも日も夕ぐれになる時ぞかへすがへすも人は恋しき、の歌に於て、古の衣には紐がついていた。それを結ぶという所から「ひもゆふ」ぐれと転義、更に衣物は折つたり返したりする所から「かへずがへす」と縁語を用い技巧的にすぐれた効果を出している。

5、例えば拾遺集六二七「音に聞く人に心を筑波嶺のみね。ど恋しき君にもあらねば」で事象に直接の連鎖がなく、唯言語上の続きから同音異義語、又はそれに類似する音を語の一部分にもつ語に転じた例、四〇種、

6、上の語が、下の語の主語の様に下の述語より同音語に転じたもの　二三種

以上六例によれば、八代集の枕詞は単なる枕詞として用いたのみでなく、「みね」と「峰」の掛詞とし、衣から「かへすがへす」と縁語を伴わしめた例が多い。使用数の上からは万葉に及ばないとしても、修辞的、技巧的には大きな発達をとげている。

これについては、先にあげた福井氏や、江戸時代末の高橋残夢氏、

三代集の頃の手ぶりは万葉に見えること多かれど、その続け様、この世の一手風にて、枕の縁語を以て一首となし、又序の如く言い下して頓て枕としたるなど万葉の頃には見えぬ遣ひざまなり、

と述べている。

三、八代集の歌人について

八代集中に使用された枕詞八〇一例のうち読人しらず、名なしを省けば、貫之の六〇例が最も多く、人磨三七種、躬恒一七例、源俊頼一一例、伊勢九例、紀友則八例、藤原忠房八例、ただみね七例……等となつている。

古今集に於ては、一二二人の作者のうち、枕詞を使つている歌人は三〇人、その中でも貫之の二二例、躬恒一〇例をはじめ、友則七例、忠岑六例、忠房五例、伊勢三例、そせい法師三例、平貞文三例が目立ち、よみ人知らずが七九例と、全使用数の四五％をしめている。古今集目録によれば、読人しらずの歌が四三一首あり、比較的古い時代の民謡的性質をおびたものであつた。

次の後撰集には、六六人の歌人が枕詞を使用し、貫之の一一例、伊勢の六例、兼輔三例、敦忠三例、もとよしのみこ三例、又、よみ人しらずが七六例で、ここでも枕詞使用

数の四一％をしめている。後撰集の場合は、撰者の歌を一首も入れていない事、新進の歌人を認めない事などから、貫之、伊勢、兼輔など何れも前時代の歌人の枕詞が多い。

拾遺集で枕詞を使用している歌人は五十二名、前と同様読み人しらずが六一例で全体の三一％になつている。又、人麿三〇例、貫之一六例とやはり、古い人の使用数が多い。

後拾遺集になると、枕詞四二例に対して、三四名の作者で、三例以上のものは馬内待と藤原国房の二人である。三代集で最も多く数をしめていた貫之の作は一例も見出せず読人しらずが二例のみになつているのはこの集の特徴と云えよう。

金葉集でも、後拾遺集と同じく、よみ人知らずの歌は少なく四種あるのみで、二二七人の歌人の中、枕詞を使用しているのは二八人と全体の一二％、俊頼の四例、顕輔、長実の三例が多い所で他は一・二例のみである。

次の詞花集では九五人の歌人に対して七人・七例の枕詞使用を見ている。これは全体の七％に過ぎず枕詞の減少が判明出来よう。

千載集でも同様の事が言える、三二八人に対して枕詞三九例、二八人の歌人が名を連ね多い所では崇徳院の四例、俊頼の四例である。

新古今の時代になると、貫之一一例、人麿七例、慈園六例、摂政太政大臣・藤原家隆・定家・俊成がそれぞれ四例謙徳公三例、能因法師三例、赤人三例等その時代の人の作が多いと共に、人麿、赤人ら万葉歌人、貫之など古今時代の人が数の上で大きな位置をしめている。

貫之の場合、「あしひきの」が一三例で全体の二一％をしめ、人麿に於ても四例で一四％、躬恒二例、伊勢、友則らも一例ずつ使用している、これは彼等が「あしひきの」なる枕詞を好んだからだ、と言うより、前章でもふれたが枕詞用例数中七五例と一番多く、又万葉時代においても一〇二例が使用されており、現在でも枕詞といえばこの語が思い起される程一般に認められ、一種の慣用語的に使用されたのではあるまいか。

結び

八代集における枕詞について、統計的に見た点を述べてみたが、以上の事を総合してみると次の如くになるであろう。

1、枕詞の定義について、「枕詞は普通五音又はそれに準ずる形で、主文の意味とは関係なしにある詞句を言い出そうとする時に上に被らせて用いる一種の修飾語であり後続の詞句との関係に於てはじめて成り立つものである。

2、枕詞使用数の面からいえば、八代集に於ける総歌数九四九四首中、七七二首に枕詞が使用され、全体の八・一

%をしめている。集別に見るに、古今一四・三%、後撰一一、五%、拾遺一二%といずれも一〇%以上をしめているのに対し、後拾遺になると三・四%と急減し、金葉六・一%、詞花一、七%、千載二・六%、新古今七%となり、この数字は、時代的なものも多少は含まれているが、それら各集の撰者好みとか撰集方針のちがいから来ているものとも考えられる。

3、部立て別に見ると、恋の部一二・三%と最も多く、一番少ないのが秋の四・八%となつている。全集を通じてとられている四季の部、恋の部についてはもう少し検討したく思つている。

4、八代集に使用されている枕詞の種類は二五一種、八〇一例あり、その中で「あしひきの」が最も多く七四例、「からころも」三〇例、「ひさかたの」二九例、「ちはやぶる」二九例など。又、三代集に使われている枕詞二〇七種のうち一三二種が万葉と同じ種類であり、後の一〇五種は、新しく創造されたもの、又は言葉の変化したものである。これを使用数上からみると、全五三七例のうち万葉時代のが三三四例で約六五%をしめ、用例数からみて、三代集の枕詞は万葉のものの比重が大だつたといえよう。

5、万葉時代に最も精彩を放つたといわれる枕詞が数の上からはとうていその数に及ぶ所のものではないが、例えば

古今127 あづさ弓春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな

と縁語的に、

拾遺320 別るれば心をのみぞつくし櫛さして逢ふべき方をしらねば

と掛詞的に、

後拾遺660 かり衣そでしのうらのうつせがひむなしき恋に年のへぬらん

と序詞に、

拾遺1221 池水のそこにあらではねぬなはの来る人もなしまつ人もなし

一句に二種を使用するなど、修辞的、技巧的に大きな発達をとげている。

6、枕詞使用数の多い歌人は貫之（60）人麿（37）躬恒（17）俊頼（10）他に伊勢、友則、忠房、忠岑などが多い。各集に於る撰集方針などの相違はあつても、概して古い歌人のうたに多く使用され、時代集を追う毎に減少の傾向が見られる。

〔参考文献〕

国歌大観
八代集全註（上・中・下）山岸徳平著

枕詞の研究と釈義　福井久蔵著　有精堂（昭25・刊）
枕詞辞典　山岸徳平補訂　大塚竜夫著　創元社（昭36刊）
新校万葉集　沢潟久孝　佐伯梅友共著　創元社（昭36刊）
日本文学大辞典　藤村作著　新潮社（昭33刊）
国語国文学研究大成7　西下経一　実方清著　三省堂（昭35刊）
万葉集全註釈（二、十二、十三）　武田祐吉著　角川書店（昭32刊）

源順伝記考

杉浦（伊藤）辰子

序

源順は嵯峨天皇の曾孫であり、和漢の学に達し詩文や和歌に巧な人物であつた。所謂、梨壺の五人のうちでも随一に数えられ、かつ、三十六歌仙の一人に選ばれている。彼の私家集には、そうした賢才ぶりが余すところなく発揮されている。しかし、一方彼は刻苦勉励して学問に励んだのであつた。

本稿は、源順集を中心に本朝文粋、扶桑集、和漢朗詠集、朝野群載、和名類聚鈔、勅撰集、平安朝の歌合、天徳三年闘詩記、三十六人歌仙伝等を参照して彼の作品、特に和歌漢詩文によつて、彼の家庭、創作活動、詠歌事情、交際関係、人物等について、考察し、彼の事蹟や伝記を明らかにしたいというのが目的である。

なお、源順集の使用にあたつては、次の如き点に留意した。

源順集は底本として続国歌大観所収（歌仙家集本による）のものを使用する。

本稿は続国家大観の源順集の番号を使用する。但し、〔一八九〇一〕から〔一九一一七〕までが源順のものである。

底本以外の引用歌はその資料による番号を用いることにする。

(一) 順の家庭

源順は嵯峨天皇の子孫である。彼の略伝を記した三十六人歌仙伝によれば、永観元年に年七十三卒とあるから逆算して延喜十一年の生れということになる。彼の系図を尊卑分脈に見ると次の通りである。